

鑑別診断を意識した

非専門医のための 胸部画像診断

胸部ほど非専門医が画像診断に関わることが多い領域はありません。COVID-19の流行に伴い、非専門医が胸部画像診断を行う機会がさらに増えているものと予想されますが、逆に言えば非専門医でもある程度のレベルで胸部画像診断をしなくてはならないということです。そこで、多くの非専門医が特別なトレーニングすることなく、何となく読めるような気になってしまっている胸部X線写真や胸部CTについて、“ある程度のレベル”に到達できるよう、わかりやすく解説したいという思いから本特集を企画しました。

“ある程度のレベル”とは日常の臨床現場で困らない程度、重大な疾患を見逃さない程度だと考えています。このため執筆陣は画像診断の専門家というよりも、第一線で患者と胸部画像に向き合う新進気鋭の臨床医にお願いしました。堅苦しい成書のような記述ではなく、目の前の医学生や研修医に教えるようなつもりで、正確性よりもわかりやすさを優先して執筆をお願いし、普段の「medicina」とは一味違った語り口にしました。専門家からは正確性について厳しい指摘を受けるかもしれませんが、執筆陣の意図ではなく編集者の要求であり、ご理解いただきたいと思います。

基本部分では正常所見を重視しました。正常構造（解剖）を理解せずに異常所見を指摘することはできません。各論では、分厚い教科書の「XX病の画像所見」というようなものではなく、主訴と画像パターンから鑑別疾患を考える日常臨床に適用しやすいものとししました。非専門医が読影する機会の少ないMRIやFDG-PET、シンチグラフィなどはバツサリ外しました。各項目は多忙な読者が読みやすいよう、マニアックなところに足を踏み入れないように、エッセンスを濃縮した短めのものとししました。胸部画像診断のすべてを盛り込んだ教科書ではありませんが、最前線の臨床医である執筆陣が実臨床で培ったセンスを重視して執筆いただきました。

項目については必要なところだけ効率よく学べるように工夫し、各項目には★印で

難易度を示しました。本当の初学者の方はまず★1つの項目だけ読んでみて下さい。その後★2つ、3つとチャレンジしてみてください。基礎知識のある方はご自身の弱点補強や、「今後後進にどう教えたらいいのか」という視点でも読んでみて下さい。

非専門医は必ずしも確定診断をする必要はありません。主訴や画像パターンから鑑別診断を挙げ、必要に応じて専門医に相談すれば事足りることも多いです。しかしながら知識がないために重大な疾患を想定できなかったり、見落としてしまうわけにはいきません。本特集により、非専門医や研修医が“ある程度のレベル”の胸部画像診断ができるようになっていただければ幸いです。

中島 幹男 (救急振興財団救急救命東京研修所/東京都立広尾病院救命救急センター)